
ぼくは、ここだよ

クロス田中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくは、ここだよ

【Nコード】

N3118A

【作者名】

クロス田中

【あらすじ】

大好きだったおばあちゃん。大好きだったぬくもり。ある日突然、柴犬のつめは捨てられた。それでもつめは、おばあちゃんに会うために歩きだした。大好きなおばあちゃんのために

捨てられたぬくもり

…ここはどこなんだろう

…寒い、なあ…。

…ぼく、一人になったの??

ぼくは、どうしたらいいの？

ぼくの名前は、とめ。

ぼくの大好きな、おばあちゃんがつけてくれたんだ。

あのね

おばあちゃんはおくを暖かい気持ちにしてくれるの。
ぎゅって、抱きしめてくれるんだよ。

でね、おばあちゃんと毎日一緒におねんねするの。おばあちゃんと一緒におねんねするのとっても暖かいんだ。
ぼく、おばあちゃんにいつも暖かくしてもらってたんだ。

だけどね、ぼく、今はおばあちゃんに暖かくしてもらえない。

さむいよ、おばあちゃん。

ぼく、知らないおばさんにね。

ずっとずっと遠い

知らない所に、つれていかれて
知らない所に置いてけぼりにされたんだ。

おばあちゃん、ぼくどうして

こんな所に置いてきぼりにされたの??

おばあちゃん、ぼく、おばあちゃんにいけない事した?

だからぼくを、捨てたの...??

ぼく、直すから。

だから、おばあちゃん。

ぼく、おばあちゃんに会いたいよ
ぼく、暖かくしてもらいたいよ

ぼく、一人はいやだよ

ぼく、おばあちゃんに会いたい。
だから、歩くよ。

「汚い犬だなあ」

学校帰りの少年が、道の片隅を弱々しく歩く柴犬を見つけた。
少年は、柴犬に向かいそんな言葉を吐き捨てた。
柴犬は、くうくうと助けを求めるように少年を見つめる。

「あつちいけ!!」

少年は、足元に転がる小石を柴犬に向かって蹴り飛ばした。

ぼくは。

嫌われてるの…??

柴犬は、よろよると、
また歩きだした。

ぼくが今どこにいるか
ぼくもわからない。

ぼく、生きているの??
それさえもわからない。

おばあちゃん、ぼくの事覚えてるのかな??
忘れてるのかな??

でもぼく、おばあちゃんに忘れられていても
会いたいよ。

会いたい

会いたい

だってぼくを暖かくしてくれる
大好きなおばあちゃんだもの

知らない道

知らない人

知らない匂い

知らない空

全部知らない。

『お前も捨てられたのか』

『…だれ?』

『おれはサスライのケンさ。』

『ケン…??』

『そうさ。お前どこから来た?』

『おばあちゃんの所から…』

『おばあちゃん?だれだよそいつ??強えーのか?』

『暖かい人…』

『暖かい??へえゝ変わった奴だな!!』

『それに優しいの』

『ふゝん』

『ケンは、どこから来たの??』

柴犬のとめに、友達ができた。
雑種のケンだ。

2人はすぐに互いに打ち解けた。

『なゝ、とめ。』

『なあに??』

『お前、どこ行くんた??』

『おばあちゃんの所だよ』

『そのおばあちゃんて奴、どこにいんだ??』

チクチク…

ムネが痛くなった。

『……わかんない』

おばあちゃん、ぼくばかだから

おばあちゃんのいる所、わからないよ。

おばあちゃん

ばかって

ばかだね。

『…よおしっ!…とめ!…!』

『なに??.』

『俺がそのおばあちゃんの所に連れて行ってやんよ!』

『本当に...??.』

『おう!-!』

『どこかわかるの??』

『.....さあ』

『...ならムリだよ...行けないよ』

『でも!-!歩いていねばきつと会えるわ』

歩いていねば...
きつと...

『ありがとう、ケン』

2人は走りだした。

知らない道を、知らない空を
知らない匂いを

探りながら、2人で。

ねえ、おばあちゃん。

ぼく、絶対会いにいくよ。

だから待っててね

？

「とめーとめー」

その頃おばあちゃんはいなくなったとめを探していた。

おばあちゃんがとめを捨てたのではなかったのだ。

「春美さん、とめをしないかい？私がかけてる間にとめがいなくなっただ」

おばあちゃんは、リビングで茶を飲みくつろいでいる春美に言った
春美は、おばあちゃんの息子の嫁で同居をしている。

春美は、その言葉に少しマズい表情をしたがすぐにこやかに返事をした。

「しりませんけど？」

春美は、そう言い茶を飲み、テレビの中のドラマに釘付けになる。

「おかしいねえ…春美さん、私が函館に行ってる間ずっと家にいたんでしょう？とめの世話も、春美さんに頼んでたじゃない」

「…ああ…そういえば私が洗濯物を干している間に逃げたのかもしれないですね」

「逃げた？とめが？？」

「ええ。犬だって野性的な生き物ですから外の世界で自由に暮らしたいと思うんじゃないですか？」

「…もしかして春美さん」

おばあちゃんがそう言いかけた時春美は立ち上がりせっせと掃除機にスイッチをいれ掃除を始めた

「春美さん！！」

おばあちゃんが言うが、春美はまるで聞こえぬふり。

「春美さん！！」

再度呼びかける。だが反応は同じだ。

おばあちゃんは掃除機のコンセントを抜き、春美につめよった。

「春美さん！！とめを捨てたんじゃないだろうね？！」

春美はたじろぎ、暫し沈黙を続けていたが痺れをきらしたのかついに口を開いた

「…おばあちゃんだつてわかつてるでしょ。生活が苦しいんですよ。犬一匹の世話するの、どれだけ大変な事か。それにねおばあちゃん。あの犬おばあちゃんがなくなったら吠えてうるさいんです。そのせいで近所から苦情がでて私に被害がくるんですよ。」

春美の口から吐かれたことはまさに開きなおりだ。

「つとめは何も悪くないじゃないか！！」

「私も悪くありませんよ。まったく…これだから年寄りはお自分の事しか考えないの…」

春美は、残酷な言葉をおばあちゃんに浴びせた。

「…この悪魔っ！！」

おばあちゃんは春美の足を力のある限り握った。

「痛っ！！離してよ！！」

春美は、足を振り回しおばあちゃんを蹴りつけた。そのせいでおばあちゃんはお腹を強打し、抱えこんだ。

「そんなに犬と暮らしたいなら一人で住めばいいじゃない！！」

春美は乱れた髪を整え怒鳴った。そして、ふん！！と息をちらしリビングを出ていった。

「返せーっ！！とめを返せー！！返せー！！！！！！」

おばあちゃんはずくまりながらも、叫んだ。春美はその言葉を無視し二階へと上がっていった。

「うつ…うつ…とめ…ごめんね」

虚しく、おばあちゃんの泣き声がりびングに響いた。

とめは、おばあちゃんが知り合いからもらった子犬だった。

特に楽しみもない毎日を過ごしていたおばあちゃんが唯一見つけた

【楽しみ】であり【安らぎ】だった。

寂しがりやのおばあちゃんはとめを寝る時も一時も離さなかった。
愛していた夫も早くに亡くし孤独だった。
心にぽっかりあいた穴を、とめが埋めてくれたのだ。

とめは、まるでおばあちゃんの言葉を理解しているようだった。

おばあちゃんが悲しい時も

慰めるようにして傍にいて手を舐める。

おばあちゃんが笑っている時は

尻尾を振り一緒に笑っているかのよう。

とめはおばあちゃんの、全てだ。

そんなとめが、いなくなった。

おばあちゃんは、絶望感に襲われた。

「とめ…私しゃもう、とめなしじゃ…」

おばあちゃんはポツリと力なく呟いた。

おばあちゃん。

ぼく、ケンていう友達ができた。だから、おばあちゃんにも紹介するよ。

『とめ〽腹へった』

ケンはごろりと芝生に寝ころんだ
あれからどれだけ進んだのだろうか。それはとめにはわからない。

『ぼくもおなかすいた』

とめはケンの隣に寝ころんだ。

『肉〽肉肉〽』

ケンハ、リズムにのせて言った。

『にくくくにくくくく』

とめは楽しげにケンと一緒に歌いだす。

『にくくくにくくくくくにくくくくくくくく』

だがそれは逆効果だったらしい。

2人のお腹が同時にぐうぐうと鳴った。

『…いい加減肉ほしいよな』

『うん』

そんな2人の前に、カラスが舞い降りてきた。

2人は目をみあわせ、ごくりと唾を飲み込んだ。

『…グルメだぞ』

ケンが言い、2人は立ち上がりそろりそろりとカラスに近づき、そしてタイミングよくはさみ打ち！

カアカアカア！！

しかし、カラスは一瞬にして飛びたった。

『はあ』

2人は同時に肩を落とした。

おばあちゃん、お腹へったよ

おばあちゃん、ぼく

おばあちゃんのおはぎが食べたいな。

すっごくおいしいの

おばあちゃん、

でもね、

ぼくね、

わがまま言ってたら

おばあちゃんに会えないから
ガマンするよ

だから、

早くおばあちゃんに

会いたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3118a/>

ばくは、ここだよ

2010年10月14日15時08分発行